

# 浄土真宗における社会実践展開の再構築

——保育・教育・福祉への視座——

研究代表者 佐賀枝夏文

研究員 水島見一

研究員 富岡量秀

## 一 はじめに

仏教を端緒とする社会実践は数多ある。その中でも浄土真宗系は規模・内容ともに最大である。本研究における全体構想は、浄土真宗、中でも真宗大谷派（以下、真宗とする）に立脚した社会的実践、特に保育・教育・福祉の三つの領域における歴史的背景と現状を調査し、厳密且つ重厚な真宗教学と社会的実践展開における課題を抽出し、そのことから、改めて仏教から広く社会へ提起することである。そのため真宗大谷派が保育・教育・福祉の領域において、全国で実践展開している関係機関・学校等と研究協力関係を構築し、継続的な研究を展開することが重要な課題であると考ええる。

本研究の立脚地となる真宗教学は、宗祖親鸞以降、現代に至るまでに、非常に厳密に、そして重厚な教学の歴史をもっている。そして近代以降、真宗教学に立脚する真宗大谷派は、保育・教育・福祉の三つの領域に対して、具体的な社会的実践を展開し続けている。その中には、三つの領域における先駆的な事業展開も多くあり、現代に至るまで、その

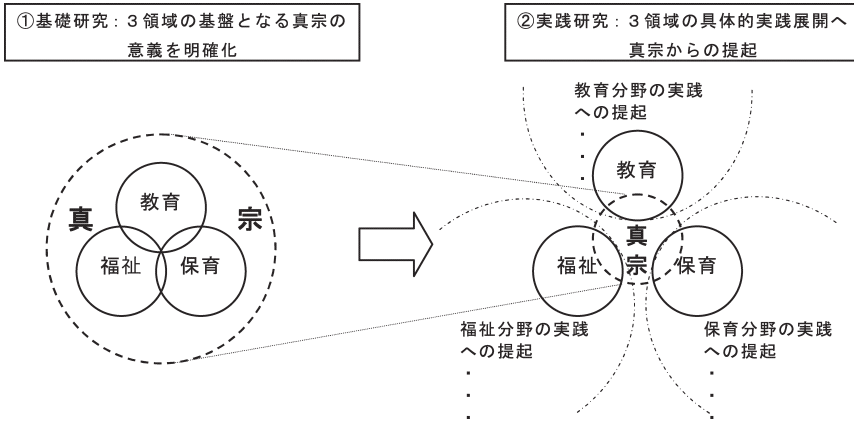


図-1 研究展開概念図

実践の基盤となっているものも少なくない。しかし、現状においては、その社会的実践の拡大において、所謂、実践が理念、すなわち真宗教学と乖離してしまい、その実践的根拠を見失ってしまっているものもある。それによる実践現場での混迷は、深刻かつ急務な課題となっている。

以上のような本研究に対する実践現場からの背景から、本研究では、真宗教学と社会的実践展開とが、如何に切り結び、真に社会に開かれていくことができるのかを、実践の場と密に連携しながら明らかにし続けて行くことが、実践の場から願われているのである。

## 二 保育・教育・福祉の三領域を貫く「真宗」の意義

そもそも大乘仏教、本研究では真宗の眼差しは、あらゆる人間存在、一人ひとりの全生涯に対して、人生の意義を存在の根底から問い直し、そして一人ひとりが真に意義ある人生を生き切ってほしいという、根源的な願いに立脚して、人間存在を捉えていると考える。

このことから真宗の教えは、保育・教育・福祉という三つの領域を真に根底から支えるものであると考える。しかし、この三つの領域の現状は、人生の歩みを通じて、必ず重層的に関わる領域でありながら、人間存在の根源的な課題への眼差しをもって、三つの領域を一貫した研究が、広く一般的に展開されているとは言い難い。そこに本研究の着眼点がある。また

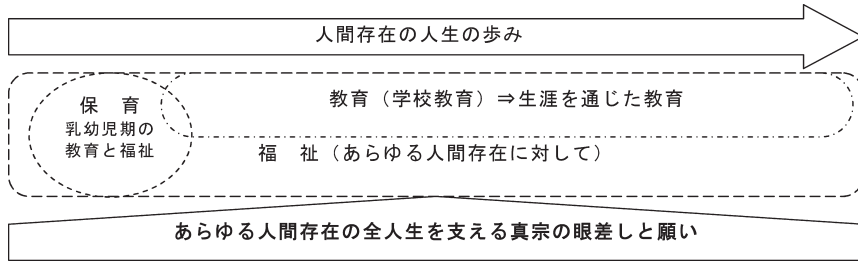


図-2 全人生と3領域(保育・教育・福祉)と真宗の関係図

本研究の基盤には、既に真宗教学に立脚した、多くの社会的実践が広く展開されていることも、他の研究にない本研究の優位性であるといえる。

このような本研究の優位性と独創性は、前述したように、三つの領域が、人生の歩みを通して、必ず重層的に関わる領域であるにも関わらず、一般的には、独立・分断した専門領域であり、実践ともなってしまうことに対して、人間存在の根源的な課題に対する視点で一貫し、その課題を明らかにしていくことにある(図1・2参照)。

本研究の展開を支える、真宗大谷派の社会的実践には、例えば以下のような展開が挙げられる。教育事業では、例えば大谷大学は、一六六五(寛文五年、東本願寺の子弟教育のために設置された「学寮」)をその発祥としている。大谷大学は日本の大学教育の歴史において、東京大学・京都大学、そして慶應義塾大学に次いで、日本で四番目、私立大学では二番目に開校された大学であり、真宗大谷派の教育事業の機軸となっている。また真宗大谷派は、全国に育英教校や尋常中学校の経営を積極的に展開し、宗門内外問わず、広く教育事業を展開してきたのである。そして現在、真宗大谷派学校連合は、大学八校、短期大学九校、高等学校一九校、中学校五校、小学校一校、幼稚園一園の構成となっている。また保育事業においては、一九〇一(明治三十四)年に東本願寺が京都に幼稚園を設置以後、急速に仏教各宗派が園を設置し、一九二八(昭和三)年には各宗派合同で仏教保育協会を設置している。その中で、真宗大谷派(東本願寺)には、社団法人大谷保育協会があり、加盟園は幼稚園・保育園合わせて、現在約五〇〇園を抱え、実践を展開している。このように、真宗教学を背景とする多くの社会実践の場が、現に展開していることは、社会的責任は非

常に大きく、何よりも、それぞれの場で子ども達が育てられ、教育を受け続けているのである。このことは真宗の真宗  
教学と社会実践の展開との切り結びを明らかにすることは急務である。

### 三 真宗に立脚した保育・教育・福祉の各領域の課題

#### 三―一 保育 真宗保育の実践

##### 三―一―一 理念構築の背景

真宗大谷派は(社)大谷保育協会を設立し、全国での実践展開の基盤としている。その実践は「真宗保育」ということを  
掲げ展開されているのである。

この真宗保育を推進し、実践展開をしている(社)大谷保育協会は、二〇〇八年八月二十三日・二十四日に開催された、  
第一三回全国真宗保育研修大会において、「真宗保育理念の宣言」として「真宗保育理念 本願に生き、ともに育ちあう  
保育」をあらためて宣言したのである。

(社)大谷保育協会は「ともに生きともに育ちあう保育を実践しよう」を総合テーマとして、一九八三年に宣言して以来、  
長い間、真宗保育の保育実践の大切なテーマとしてきた。この総合テーマで示されている方向性、つまり「ともに生き  
ともに育ちあう」ということは、今回の「真宗保育理念の宣言」以降も変わることはない。しかし、総合テーマが一九  
八三年に宣言されて以来、真宗保育の保育実践を取り巻く環境は、さまざま変化したのである。

例えば、以下のようなことが挙げられる。

(1) 「ともに生きともに育ちあう」という言葉の一般化

(2) 真宗保育の実践・推進者の世代交代

(3) 保育に対する社会的意識と要求の高まり(さまざまな保育理論や方法の流入など)

ex. 幼稚園教育要領・保育所保育指針

一九八九（平成元）年の改訂

一九八九（平成十）年の改訂

二〇〇八（平成二十）年の改訂

三度の改訂を経験

このような変化の中で、今一度、真宗保育の立脚地を確認する必然性があったのである。

そこで(社)大谷保育協会は、真宗保育の立脚地となる、「真宗保育の理念」を構築するために、二〇〇七年四月、真宗保育理念構築会議を発足した。この会議では、「真宗保育の理念」についての議論のみならず、今後の真宗保育の研究と実践とのあり方などを含めた、幅広い議論を重ねており、現在も継続している。その中で保育実践と結びついた、「真宗保育学」の確立の必要性についての議論も展開している。そのためには(社)大谷保育協会、すなわち実践現場である園と真宗大谷派学校連合の各研究機関との連携関係の構築が重要であることを確認してきたのである。

また「真宗保育の理念」を宣言するにあたり、現場の保育者との理念の共有を考え、さまざまな表現（わかりやすさ）についても議論を重ねている。しかし、親鸞聖人が明（顕）らかにされた真宗の教えを、研究者と実践者が「ともに」共有し、「ともに」考えていくことを願って、「本願に生き、ともに育ちあう保育」という言葉をもって敢えて宣言したのである。当然、実践者からは「なぜ？」や「わからない」といった声が挙がった。ではなぜ「本願に生き」と確かめるのであろうか。なぜならば、ここに真宗保育の独自性があり、真宗保育が真宗保育たる意味が確かめられるからである。真宗保育は、一人ひとりの子どもが、自分の人生を豊かで、ほんとうに意義あるものとして生き切ってほしいと願っている。しかし日々の保育という営みには、無数の問題が常に湧き起こり、尽きるということがない。なぜならば、保育とは、子どもと保育者、そして保護者という、人と人との間において展開される営みだからである。ここに子ども・保

育者・保護者それぞれが「ともに」ということに抱える深い悩みがあるのである。

保育とは、人と人が「ともに」ということに抱える無数の問題を、具体的に考え、受けとめていく営みといえるだろう。その営みの中で保育者は、子どもたちの育ち・将来をいかに見据え、どのような願いをこめて保育を展開するかを問われている。それは保育者自身の人生の歩みの輝きと豊かさ、換言すれば「生きる力」が問われているのである。

この課題を真宗保育は、深く考え、実践していくために、親鸞聖人の教えに学んでいくのである。親鸞聖人は、わたしたちが「ともに」を実現する歩みを獲得するためには、「本願」と出会い、その「本願」に目覚め立って生きるほかにないことを明らかにされたのである。そして真宗保育者の「本願に生きる」歩みは、わたしたちの思いもよらなかった「願い」への気づき、そしてその「願い」にうなずき、わが身を振り返ったときの現実に向き合い続けることであろう。保育者の専門性について、佐伯胖は

本当の意味での専門性は（中略）日々の実践を「省察」することが必要です。自らの実践を「省察」すること  
は、自分のかかわった子どもたちが見せてくれた姿と「対話」することです。

（佐伯胖編『共感 育ち合う保育のなかで』ミネルヴァ書房、二〇〇八年、一二二頁）  
といわれる。では、何をもとに「省察」するのであろうか。そのことがはつきりしないかぎり、保育者の専門性とはならない。また、その「姿」がほんとうの「姿」として見えなければ、「省察」にはならないのであろう。

真宗保育の保育者は、「本願」に照らし出された、ほんとうの子どもの姿、そして「わたし自身」の姿に立って、日々の保育実践を「省察」するということであると考える。そこに一つの真宗保育の具体的な独自性と専門性があるといえるのではないか。

真宗保育は「子ども」を所謂「真宗を信仰する者」にしようといった姿勢で保育実践を展開しているのではない。そのような姿勢は、逆に子どもの育ちにとって意味はない。子どもではなく「おとな」を課題とするのである。具体的には保育者であり、保護者なのである。真宗保育の場の実践者は、たまたま縁あって就職した者がほとんどである。また保護者のはとんどが、「真宗の園だから」といった理由以外の、様々な理由で入園させているのである。特に保育園に関しては、その入園形態からその傾向は顕著であろう。

真宗保育の実践者のほとんどは、「真宗学」を学んでいるわけではない。保育者の養成校を出て、就職している。真宗に子どもの頃から触れていた実践者は、ほとんどいないのである。その現実にあって、真宗保育の実践を続けている園が全国各地にある。それを支えているのは、(社)大谷保育協会の研修プログラムの展開、各園での「真宗」への学びの展開、そして何よりもその実践者達の、日々の真宗保育との真摯な格闘である。つまり実践者が支えてくれているのである。そのことを真宗大谷派関係の養成校は十分認識すべきである。

日々真宗保育と格闘している実践者は、保育実践の中で「わからない」、「はつきりしない」という葛藤を抱えて、子ども達と一緒に「手を合わせ」、仏教行事に取り組んでいる。では「わからないから」、「はつきりしないから」という理由で、実践を放棄しているかといえば、理由は様々であろうが、ほとんどそういうことはないのである。「わからない」を抱えつつ、真宗保育の研修にもぞみ、悶々としながらも実践を展開してくれている。実はこの姿勢こそ、「真宗の学び」そのものなのだと考える。それを具体的に子ども達と実践しているのである。では現場は十分な体制なのかといえば、そうではない。だからこそ(社)大谷保育協会は、新たに「真宗保育」に関するテキストやカリキュラムといったものを常に模索し続け、実践者を支える活動を展開し続けているのである。なぜ続けるかといえば、何よりも目の前の子ども達がいるからに他ならない。この事実が実践を支えている。

三一一三 真宗保育者の養成校の課題

真宗保育に関する研究は、本学では常に(社)大谷保育協会、つまり実践現場と連携し進めていく体制づくりとその重要性の認識は確認されている。

本研究で連携関係の構築の重要性を唱え、組織・体制づくりの強化を進めている真宗大谷派学校連合会は、二〇〇七年から真宗大谷派学校連合会加盟大学・短期大学(部)における保育士・幼稚園教諭養成に関わる担当者同士が、発表・協議をとおして研鑽を深め、「真宗保育」についての基本理念を共有し、真宗のみ教えに基づく幼年教化の充実を図るために「真宗保育研究会」を発足させた。この「真宗保育研究会」は年一回、過去に四回ほど開催されている。このことから、保育士・幼稚園教諭養成が関係学校の大きな関心事であり、重要視していることがわかる。特に「真宗保育」は、各校の建学の精神からの具体的な展開であり、各校の独自性と社会的意義とリンクするものである。このような取り組みは、全国の養成校の中で他にないことであり、「真宗保育」の研究・養成を展開する基盤をすでに有しているのである。しかし、その基盤を有意義に活かすきれていないのが現状である。その研究・養成の基盤は、すでに実践の場を全国に有しているのである。それが(社)大谷保育協会である。一般的に養成校は、研究・実践展開の場を出来るだけ増やしたいと考え、付属園は一園であるが、関係園という形で連携先を増やしていくという現状ではなからうか。そのような養成校の現状にあって、真宗保育に関わる養成校は、全国に「真宗保育」の実践展開の場があり、現場サイドから有効に活かして欲しいと願われているのである。養成校としてこれ以上の財産があるだろうか。これを活かすきれないのは、ひとえに養成校サイドの問題ではなからうか。この問題は各養成校の教員の「真宗保育」、特に「真宗」に対する偏った認識が潜在していると考えられる。このことから、今後も(社)大谷保育協会と真宗大谷派学校連合会との連携の強化と方向性を確かめ続けていくことが大切であると、「真宗保育研究会」においても共有されたことである。



三―二 教育 廣小路亨の「教師論」——エゴイズムからの脱却による教育の再生を求めて——

次に「教育」の領域における研究展開についてである。「教育」に関しては、関連学校の高等学校の教員と連携し、真宗に立脚した教育の実践者である廣小路亨を取り上げ、研究会を重ねてきた。今回の報告では、廣小路亨の「教師論」を中心に論及していく。それは今後、各関連学校での教員養成を考えていく上でとても大切な視点であり、教員養成の要となるものだと考える。

金子大榮は「要するに教育論は教師論です」（『人間性の回復を求めて』）と言う。そのように、教育を再生するには、先ずもって「教育論」に先立っての「教師論」を確立することが必要であろうと思われる。教育とは、教師と生徒との関わりにおいて成立する。その関わりの中で、生徒は人として成長していくのである。すなわち、教育が生徒にとって有意義かどうかは、ひとえに教師に懸かっていると見えよう。ここに、「教育論」に先んじて「教師論」を明らかにする必要性がある。

一般的に「教育は人なり」と言われるが、沢柳政太郎は「教育は教師なり」と訴える。沢柳の教育観は、「教育とは誠を尽くすことだ」とし、さらに「誠を尽くすとは、いつでもどこでも誰とでも、駆け引きをしないことだ」という知見に集約される。沢柳の「教師論」は、現場からのものであり実践的なのである。そして、その沢柳の感化を受けたのが、大谷中・高等学校名誉校長である廣小路亨であった。

思うに多くの教師は、生徒との関わりにおいて、常に自らの不誠実さや、駆け引きするとうような醜さと直面しているに違いない。したがって、心ある教師は、「誠を尽くすことだ」という言葉に照らされ、「駆け引きする」自己を慚愧するのである。教育現場においては、このような教師の慚愧の心が、教育を成り立しめていかなるのか。教師が自分自身のエゴイズムに気付くところに、生徒は教師を信頼するのではないか。廣小路の「教師論」は、このように展開される。

廣小路亨は、昭和二十二年、三十九歳の若さで大谷中・高等学校の校長に就任した。以来三十年にわたって、親鸞や大谷中・高の初代校長の清沢満之、また二代校長稲葉昌丸や三代校長沢柳政太郎らによって現場から発せられる教育観に導かれて、大谷中・高校の教育に尽力した。次のように述べている。

格調高い、かがやかしい伝統を受けついできた、この学園にあつまっている私どもは、いったいそういう先輩の労苦をこのままくいつぶしていいののか、そのことを反省していききたい。私たちは、学園のかがやかしい過去をふりかえてみて、今これを土台として更に一步前進するところの覚悟を新たにしなければならぬ時期に入っているとしたいと思います。

（「学校創立の日によせて」『学窓余言』）

今日の教育は混沌としている。理想と現実が交錯し、教師も生徒も疲弊感に覆われている。ここに廣小路は、「先輩の労苦」に学ぶことを主張する。大谷の教育理念は、親鸞の「樹心弘誓仏地」に起源する。そしてそれに基づいて、清沢ら多くの先輩が校長として、つまり教育現場において、労苦を積み重ねてきたのである。「労苦」とは、生徒と関わりにおける自己のエゴイズムとの対峙であろう。そのような「労苦」こそ「教師論」の土台なのである。

「教育論」は往々に理想的である。それに対して「教師論」は実践的である。生徒が理想的教育に疲弊している今日の教育においては、「教育論」よりも「教師論」が重んじられなければならないと思われる。

廣小路は戦後日本の教育を総括して、次のように述べている。

日本の教育は、戦後、とくにヒューマニズムを根底に置くようになりました。しかしそれは、人間の尊厳性という面だけを強調したために、人間の持つ根元的なエゴイズムへの反省を忘れてしまったようです。その結果として、今、そこからくる驕慢というか、驕りの文化というか、そういったものが出てきていると思うのです。今日のいろいろな青少年問題もそこから出ているのではないか、いたずらに人間の尊厳性のみをちやほやしているところに、今の教育上の欠点が起因しているのではないかと思うのです。ですから、もう一度、人間の持つ根元的なエゴイズ

ムに鋭いメスを加えるような人間教育をしない限り、戦後の教育を救うことはできない、という思いがあったのである。  
〔建学の精神〕『加齢のこみちで』七五頁

顧みれば、戦後日本では、民主主義教育が掲げられ、ヒューマンイズムの教育が展開されてきた。たとえば「人権」が高らかに叫ばれ、「人間の尊厳性」が謳われてきている。しかし、そのような理想とは裏腹に、陰湿なハラスメントやいじめ、若者の自殺が頻発しているのが現実であろう。今日の教育は、何か大切なものを根本から見失っているのではなからうか。たとえば、人間性の回復が叫ばれつつも、生徒からは人間性そのものが消え去っているように思われる。民主教育やヒューマンイズムが讃えられ人権が叫ばれているにもかかわらず、それらが綺麗事に終始し、生徒の心に容易に根付いていないのではなからうか。では、その原因はどこにあるのであろうか。

廣小路は、それを人間の「根元的なエゴイズム」を見定める視点が欠落しているところにある、と訴える。教師の中に自己のエゴイズムを見つめる眼差しが、忘れられているのである。ここに先輩の「労苦」を尋ねる必要性がある。

廣小路は、親鸞と同様、人間存在の本質を「エゴイズム」と押さえている。「驕り高ぶるもの」と見ているのである。世間で広く通用するのはヒューマンイズムであろうが、そのヒューマンイズムの根底に横たわるのがエゴイズムである。教師がそのような自己の根元的なエゴイズムに目を瞑ってヒューマンイズムを語ったとしても、それは生徒にとっては「綺麗事」でしかなく、やがて生徒は疲弊する。

親鸞は自分自身を「煩惱具足の凡夫」と見定め、エゴイズムを懐く自分自身を深く慚愧した。そしてその慚愧の姿が、十方衆生を救済した。すなわち、生徒との関わりの中で実感する教師の慚愧の心だけが、教育を可能ならしめるのである。

しかして廣小路は、人間のエゴイズムに鋭くメスを入れるところに、教育の出発点を見出すのである。先ずもって教師が自らのエゴイズムにメスを入れ、慚愧する心を明らかにしなければならぬ。廣小路は、そのことを次のように具

体的に述べている。

高校の先生方でよく、「今日は授業がないから一時間遅れていく」とか、「午後から 授業がないから先に帰る」とか平気で言う人がいます。自分は一八時間課せられているのだから、一八時間をこなせば、それで一人前の教師だと思いついでいるのです。ばかげた話ですが、教育というものは単に知識を与えることだと思いついでいるのです。もちろん知識を与えることも大切ですが、それだけではないのです。

（「ほんとうの宗教教育を求めて」『加齢のこみちで』）  
自らを律し切れない教師の姿がここにある。続けて、次のように言う。

「教師は授業で勝負しなくてはならない」といいますが、教師はまた、「後姿で教育 をしなくてはならない」のです。それができなくては教師とはいえません。うしろ指をさされるような教師が、実際にどうして人間教育ができるかと思っています。ですから、教師としてみずからの生きざまが問われないような教師であつてはいけないし、いつでも自分に対してそれを問うていける教師になることが大事だと思つています。

そして、

他人からいわれなければできない人間、規則がなければ横着をする人間、そのような人間がどうして子どももの自主性を育てることができましようか。

（同前）

と、厳しく指弾する。生徒は、教師の自分に対する姿勢によって育まれる。また教師は、生徒との関わりの中で気づかされるエゴイズムと向き合うことで、次第に教師となつていく。教師と生徒の「相依相関」、ここに廣小路の「教師論」の真髓がある。

教育の再生は、先ずもつて教師の自己のエゴイズムの自覚に依るものである。教師の生徒と関わる姿勢そのものが、つまり生徒に対する慚愧する心が、教育を成り立たせるのではなからうか。教師の姿勢そのものが、生徒の心に響くか

らである。実に、教師の生徒に対する姿勢に、教育力があるのである。廣小路の「教師論」を明確にしなければならぬ理由はここにある。

### 三一三 福祉 真宗大谷派の福祉事業展開の歴史と課題

#### 三一三一 研究の中間報告

明治期以降から現代にいたる、真宗大谷派の社会貢献や活動の調査研究に着手したのは、筆者が本学短期大学部幼児教育科に就任してからで、すでに約二五年の歳月がたった。はじめに着手した調査研究は、明治期の真宗大谷派の社会貢献の発掘であった。この調査研究の成果は一九八九年の「大谷大学真宗総合研究所報第六号」に「近代大谷派教団社会事業の研究」として掲載し公表した。内容は大谷派慈善協会編雑誌『救済』の総目次を掲載し、同協会と雑誌の全貌を公開した。この雑誌は、吉田久一の推挙もあり二〇〇一年に不二出版から復刻版として出版された。明治期・大正期の雑誌はおおくは散逸しており、収集には困難をきわめ復刻には約一〇年の時間を要した。この『救済』の復刻で、明治期から大正期の真宗大谷派の社会貢献の動向は明らかにになった。

長らく、戦後の社会貢献に関して調査研究が課題であった。この研究調査は、淑徳大学長谷川匡俊の発意のもとにはじまった研究プロジェクトへ、筆者の参加で着手することになった。長谷川の研究プロジェクトは、各宗派から代表研究者が担当して「宗報」をもとに検索して時系列に整理し、年表を作成するという大規模なものであった。科学研究費を受託するまでは、長谷川仏教文化研究所の研究としてはじまった。検索記事の膨大さ、また、検索方法の統一までに三年間を要して、研究の体裁と方法論を確立して科学研究費の受諾を受け調査研究に入った。本格的に研究が動き出してから三年間をかけ都合六年の歳月を経過して、二〇〇七年法蔵館から『戦後仏教社会福祉事業の年表』『戦後仏教社会福祉事業の歴史』の二巻として出版された。この出版は、二〇〇七年度の社会事業研究学会からは文献賞ならびに仏教社

会福祉学会から学会賞を受賞した。この年表作成の完成をみて、真宗大谷派の明治期以降大正、昭和、平成までの社会貢献の全貌を公開したことになる。

### 三―三―二 封建社会から近代化へ

徳川幕藩体制が築いてきた封建社会が崩壊し、近代化のはじまりは、既存の社会秩序崩壊をまねいた。近代化以前の社会は、幕藩体制の維持のしくみとして関所をもうけて、領地への人口の流出を防止し、流入を規制して維持された。自由を奪われた民衆は、ムラ共同体を築いていくことになった。ムラ共同体の生成については、為政者の恣意的な意図がはたらいたと考えるのが妥当であろう。管理と統治にはムラ共同体の形態が相互に監視しあうしくみは好都合であったと考えられる。そこで、醸成されたのが相互に助け合う「相互扶助」である。いうならば、民衆を土地にしばりつけ、統治するしくみであるが、近代化以前の主従関係、支配と被支配の関係では自然と考えられる。この封建社会は「封建的」「保守的」という規範が守られた。封建社会は「自由なき秩序社会」であったといえる。生活をささえた生産は、再生産が維持されただけで、余剰生産物のない循環社会システムが営まれていたことになる。近代化以前の社会、民衆の生活は、苦渋や貧困の常態にたいして民衆文化やおきてを安全弁として営まれていた。

明治維新によって、封建社会は崩壊し、民衆の往来は制限を解かれた。人口は都市へ大量に流入しはじめて「都市化」がはじまった。一方では農山村から人びとは流出しはじめ「過疎化」がはじまった。近代化がもたらした人口の偏移現象は、さまざまな問題を孕むことになる。明治期に抱えた問題は、都市のスラムであった。都市に形成されたスラムの内情は、ムラ共同体から解放されて働く場を求めて都市へ流入した民衆を待っていたのは、不安定な日雇い労働であった。土地を捨てた民衆が、賃金労働へ移行するのは容易なことではなかった。不安定な「日雇い労働」であった理由は、雇用関係は縁故による雇用が主流で、伝のない流民同然の民衆を雇用する事業主はなく、民衆をスラムへ追い込んだ理

由である。都市のスラムは、上下水道がなく、劣悪狭隘な生活環境のなかで、経済問題、疾病問題、教育問題、労働問題、治安問題など生活のすべてに関わる問題を抱えた。近代化と真宗大谷派慈善・慈善事業の萌芽・隆盛は帝都東京の浅草別院が時代や社会状況の接点であった。浅草別院の輪番大草恵実は、役宅から別院道中にあった松葉町のスラムの惨状にころいたため、親交のあった明治の近代化の推進役であった渋沢栄一に意見を仰ぎ、無料宿泊所の開設にこぎつける。渋沢から安達憲忠の派遣と加勢を受けてこの事業ははじまった。無料宿泊所は、実質は労働幹旋所の機能をもったものであった。この事業を支え、発展させたのは大谷派婦人法話会であった。

近代化によって、第一次産業から第二次産業へ移行を果たすには、農業人口から工場労働人口へおおはばな移動が必要であった。近代化に必要な工場労働人口は、各地にできた無料宿泊所がその役割を果たした。近代化と都市化そして、スラムの形成、その解消への一翼は、無料宿泊所が工場労働人口への移動というかたちで関与した。工場労働人口の増大で、わが国の近代化が推進することになる。近代化とスラムについては、前述した道筋があるものの、スラム改良へ関わったセツルメントも見逃すことはできないだろう。近代化という潮流の中で真宗大谷派の慈善が萌芽し隆盛期を迎えたとはいえるであろう。

### 三―三―三 近代化と真宗大谷派の動向

近代における真宗大谷派の慈善・慈善事業、そして、社会事業活動のはじまりは、明治期と考えてよいだろう。明治前期は、社会・生活面のあらゆる部門が変貌する時代を迎えた、いうならば、未知の得たいの知れないエネルギーが動きだしたときである。そのエネルギーの源は、産業革命であり、社会のあらゆる仕組みを変化させた。わが国の産業革命は、吉田久一が指摘する殖産興業期にあるとよいだろう。そこから生まれたものは、実にさまざまであるが、ダイナミックに変貌したのは生産様式であった。第一次産業から第二次産業への変化は、市場経済の発展を促した。さらに近

代化は、「拡大再生産」という、かつて経験したことのない現象をもたらした。近代化以降、現代にいたるまで、「拡大再生産」を継続しなければならないという悪循環に入ることになった。政治経済問題、そして社会問題のすべては拡大再生産に端を発しているといえるであろう。拡大再生産は、いつかは破綻し破壊を意味することは予想されたが、そのつどあらたなシステムを工夫して維持されてきた。そこから生み出される余剰生産物は、生活面に物質的な豊かさをもたらし、これこそが社会発展と考えられていた。近代化の実態は、人間の欲望を活性化させるシステムであったといえる。近代化によって人類史上はじめて、余剰生産物が生み出されたことで、豊かさをもたらしたかに見えたが、人間が持つべきではないものまでも所有してしまった。システムを維持するために、化石エネルギーを枯渇するまで使い、さらに原子力という自然サイクルとは異なるエネルギーを生み抱えることになった。物質的な豊かさは、人間が求めつづけていた「救済」とは程遠いものであった。近代化が拡大再生産システムであることからすれば、時代の流れを止めることは並大抵のことではない。「時代はもとにもとせない」という常套句で処理されてきた。

このようなことを前提に、近代化と真宗仏教とが矛盾なく成り立つかという問題を考える必要がある。近代化の論理は、市場経済から生み出される優勝劣敗という熾烈な競争原理で成り立ち、強者と弱者を生み出すしくみである。それについて真宗仏教の説く、「むだなものはない」「生きとし生けるものすべてに仏性がある」「世界とどのよう論理矛盾を起さずに、人びとを解放できるか。このことを課題として真宗大谷派宗門のあゆみがあったといえる。近代化の黎明期には、監獄受刑者への教誨へ多くの僧侶が動いた。その流れは、刑期をおえた人びとの社会復帰支援としての、免囚保護事業へ腐心のあとが残されている。また、宗門人有志が立ち上がり労働福祉に立ち上がり果敢に支援をおこなった、その基盤を得てわが国の労働福祉が緒についた。その後の流れは、人権問題について、権利擁護の立場を社会へ訴えた潮流は重要な道筋だったといえる。近代化という時代の潮流にあって、果敢に真宗の教えを説きつづけてきたといえるであろう。



三一三四 近代化は越えることができるか

二十一世紀にはいり、近代化した社会が破綻してみると、見えてくるものがある。封建社会は人間の欲望や欲求にたいして抑止力としてはたらく社会制度であった。生活、社会をささえた生産システムが「再生産」「生態系の循環体系」のなかで維持されていた社会であった。さらに、保守的で封建的でなければ、「再生産」が維持されなかったということなども見えてくる。封建社会のさまざまな問題は別として、「維持可能な社会」いわゆるサステイナブルな社会をどのように創設できるかということこそが、めざすべき福祉社会であるならば、真宗仏教の社会にたいしての主張もみえてくるのではないか。

封建社会から近代化社会への転換は、このように大きく変貌した。民衆の生活も縛られていた封建的で保守的な生活から解放された。ムラ共同体の連帯のなかでの営みは崩壊し、近代化によって社会は「優勝劣敗」の競争社会で孤立した営みへと変わった。社会は、親鸞聖人が見抜かれた五汚悪世であることは、時々刻々証明されている。

親鸞聖人の説かれた社会観を基盤にして、近代化に接近しなければならぬだろう。真宗大谷派の実践部門である教育・保育・福祉においても、近代化を定点にして考察することで明らかになる事象があるとおもう。

三一三五 真宗大谷派の人物史にみる社会貢献

真宗大谷派の社会貢献としての、慈善・慈善事業、社会事業、そして社会福祉のあゆみには、二つの考え方があつた。ひとつは、人物中心にその社会貢献活動を顕彰し整理する方法がある。この方法は、具体的に人物と社会貢献を結びつけ理解できることである。問題がこのころのは、時系列に事象の連鎖を一貫性ある流れとして理解しにくい点である。また、人物中心に研究した場合は、宗門内では著名でも、一般的に理解が得られにくい場合もある。しかし、人物中心に調査し整理しておくことで全体像を掘り起こすには役にたつとおもう。今後も地道な人物の掘り起こしも必要である。

簗輪対岳の監獄教誨

大草恵実の免囚保護、慈善・慈善事業

寺永法専の監獄教誨

武田慧宏の監獄教誨

奥村五百子の慈善事業・軍人援護事業

大谷瑩韶の社会事業と社会貢献

山本暁得の視覚障害者事業

武内了温の社会課、社会活動

中村久子の福祉観

ここで、若干の人物についての研究の方向性を示しておく。簗輪はわが国の教誨界では嚆矢として、あまりにも著名である。今後はその原動力になった実践理念について研究をすすめなければならないだろう。大草の活躍は宗門ではリーダーとして著名であるが、社会事業家としての一面を世に問う必要があるだろう。寺永は網走監獄教誨の祖として、すでに顕彰されているが、人物、業績をあらためて顕彰する必要があるだろう。武田はわが国の監獄改良の功労者として活躍の場はおおきく、その業績を精緻に調べ顕彰すべきであろう。奥村のはじめた愛国婦人会は、戦争という事象のなかで埋没しているが、奥村のはじめた保育事業や教育実践は顕彰すべきであろう。大谷瑩韶は、大谷大学を卒業し、アメリカの社会事業の源流ともいえるシカゴへ留学し、帰国後、わが国、宗門の社会事業の啓蒙家として活躍した。その偉大な仕事と業績が埋もれている。顕彰しなければならぬ第一級の人物である。山本の実践理念のあしあとは、京都仏眼協会、仏眼更生学校、京都ライトハウスに残されている。宗門でこの業績を顕彰する必要があるだろう。武内は、

宗務機構にはじめて設置された社会課の主事として就任し、社会との接点で活躍した人物である。武内からの流れとして宗門では人権思想、人権問題のリーダーとして考えられているが、明治期からの流れとしてとらえる必要があるだろう。中村は、障害者の「ともしび」として生涯を生きた人物である。真宗の障害観を開示した功績を顕彰すべきであろう。

### 三―三―六 真宗大谷派の期別分類からみる社会貢献

真宗大谷派の慈善・慈善事業、社会事業、社会福祉への時代区分を研究の目処としたい。近代化以降はまず、慈善・慈善事業時代と区分するのは、一般的であるが、真宗大谷派においては、次のように区分をしてはおもう。

#### 第一期 明治前期以降、監獄教誨・免囚保護事業時代と歴史的人物の輩出

明治前期は監獄教誨・免囚保護事業時代とするのがよいのではないかとおもう。わが国の監獄教誨は、真宗大谷派の箕輪対岳が、明治四年に監獄教誨を政府に進言したことが嚆矢であり、敗戦まで真宗大谷派は教誨の一翼を担っていた。この間に活躍した真宗大谷派の箕輪対岳、武田慧宏、寺永法専などは、わが国の教誨を切り開いた功労者として著名である。

この時代の真宗大谷派の社会的な事象や流れを調べるための、主な文献を紹介しておく、つぎの文献資料がよいだろう。教学研究所編『近代大谷派年表』において概略を把握するのが手順としてよいだろう。ポイントが絞られれば、つぎの作業として、真宗大谷派の展開を知るには、第一次資料である『宗報』の記事にあたってほしい。『宗報』等機関紙復刻版があり、検索も容易である。そして、それぞれの事象の分析について、『吉田久一著作集』はすべての事象にたいして網羅されており、かならず手にして調べてほしい。これらの文献資料は、入手可能であり大谷大学図書館に所蔵

されており、検索可能なものである。

文献資料

『教誨百年』上下 浄土真宗本願寺派・真宗大谷派 昭和四十八年

『寺永法専師』網走監獄保存財団 平成五年

『吉田久一著作集』全七巻 川島書店 一九九三年完結

『「宗報」等機関紙復刻版』真宗大谷派宗務所出版部 二〇〇三年完結

『仏教社会福祉辞典』日本仏教社会福祉学会編 法蔵館 二〇〇六年

第二期 明治後期以降、大谷派慈善協会時代

明治後期は、大谷派慈善協会時代としてはよいのではないかとおもう。浅草別院を拠点に、有志が同協会を結成して活動した時期である。流れとしては、雑誌『救済』の刊行が著名であるが、雑誌『救済』（一九一一（明治四十四年）から一九一八（大正七年）まで刊行）の刊行は宗門への情宣にとどまることなく、わが国の慈善・慈善事業、そして、感化救済事業の牽引役になった。この潮流は、竹内了温を招聘して本山宗務機構に社会課の設置をみることにつながる。社会課の設置は、真宗大谷派が社会化する意思表示でもあったといえるであろう。

文献資料

『武内了温』武内了温先生遺稿刊行会編 文明堂 昭和五十一年

『吉田久一著作集』全七巻 川島書店 一九九三年完結

『「宗報」等機関紙復刻版』真宗大谷派宗務所出版部 二〇〇三年完結

『仏教社会福祉辞典』日本仏教社会福祉学会編 法蔵館 二〇〇六年

『救済』 大谷派慈善協会 復刻 不二出版

### 第三期 大正期以降、大谷瑩韶の留学帰国と社会事業時代

大谷瑩韶は、大谷大学を卒業後、渡米しシカゴへ留学している。帰国後、雑誌『救済』の主筆としておおくの社会事業への提言をしている。その足跡は、宗門では児童教化、青少年教化へおおきな足跡を残している。宗門寺院はこぞって日曜学校を開き、児童教化へ日曜学校の隆盛期を迎えた。また、わが国の社会事業のリーダーとして、京都においては社会福祉協議会の設立、京都ではじめての老人ホーム「同和園」の設立への提言者として活躍している。大谷瑩韶の啓蒙活動を中心とする宗門が動きだした時代である。

### 第四期 戦後の社会福祉時代

戦後、福祉三法が整備され、そのあと福祉六法が完備された。これまで宗教家や民間人がもっぱらに開拓してきた社会事業は一変して、憲法第二五条に生存権を謳い「社会福祉、社会保障、そして、公衆衛生」によって権利保障する時代がはじまった。明治にはじまる真宗大谷派の伝統ある慈善・慈善事業の歴史が終焉し、あらたな模索の時代を迎えることになった。

### むすび

今回の研究では、これらの成果をもとに真宗大谷派の社会的実践の三部門において、その違いと共有性について考えることができた。ふりかえると、筆者のおもいとしては、真宗大谷派の社会貢献、実践のあり方を知りたいという素朴なものであった。見えてきたのは「近代化」と真宗仏教、そのあり方はいかにあるべきか。明治期にはじまる先輩たち

を顕彰し、公開したいというおもいだった。それにはどのような史観にたつべきか、どのように流れを理解すべきか課題はおおい。筆者の役割としては、本学において福祉系教員としては赤坂一を初代とすれば、二代目として研究を発展しなければならぬ気があった。ただ、悔やまれるのは、社会福祉学と心理カウンセラーという教員生活であった。筆者の求めたものは、だれでもない「自らの救い」を真宗、そして福祉と心理に求めた。真宗大谷派の社会貢献や先輩の顕彰に専念すれば、おおきな成果となつて実をむすんだかもしれないと、悔やまれる。

ここに、一応の研究の基盤整備をおえた報告と、あとにつづく後進にお願いしたいことがある。真宗大谷派宗門に伝統された教えのたしかさ、そこには、かならずや社会での実践として、なにを「いま、なすべきか」がみえてくるはずである。地道な研究の積み上げと、あくなき探求と、短兵急な答えではなく問いつづけてほしいと願う。